

T. S. エリオットの初期の詩における円環のイメージ

Circular Images in T. S. Eliot's Early Poems

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成27年9月30日受理)

はじめに

“The Love Song of J. Alfred prufrock” (1910-11) から *The Waste Land* (1922) までの T. S. Eliot (1888-1965) における初期の主要な詩は、専ら退廃的な都会生活に焦点を当てて、人間や人間社会の醜悪な姿を描写する。そのような描写はわれわれ読者に、語り手たちの言動を介して、詩の終わりの場面が冒頭の場面を連想させる円環のイメージを与える。初期の短い詩は、退廃的な都会生活における人間や人間社会の醜悪な姿の様相を示すが、エリオットの詩集に収められたとき、その詩集に見られる円環のイメージの一面を印象づける。こうした初期の詩の描写は、われわれが様々な角度から作品を鑑賞するために有益である。それは、エリオットの詩を魅了させる大きな要因となる。

そこで本稿の目的は、第一詩集 *Prufrock and Other Observations* (1917)、第二詩集 *Poems* (1919)、第三詩集 *Poems* (1920)、代表的な *The Waste Land* に表現された内容に着目して、エリオットの初期の詩における上述した円環のイメージの特徴を検討することである。

1. *Prufrock and Other Observations* における都会生活の描写

1917年、T. S. エリオットの第一詩集 *Prufrock and Other Observations* が刊行される。この第一詩集の冒頭は、“The Love Song of J. Alfred Prufrock” である。その後、“Portrait of a Lady” (1910-11)、“The Preludes” (1910-11)、“Rhapsody on a Windy Night” (1911) が続いている。まず、これら四つの詩をこの記載順に論じることとする。

“The Love Song of J. Alfred Prufrock” の書き出しは、“Let us go then, you and I, / When the evening is spread out against the sky” (1-2)¹ である。語り手の J. アルフレッド・ブルーフロックは、話し相手の“you”と連れ立ってどこかに出かけようとする。話し相手は、詩の表題から察して、彼の恋人、彼の内面の自己、一般の読者が想像される。書き出しでは、二重三重の人物像が浮かんでくるだけで、明確な姿が提示されていない。ブルーフロックはそうした不確定な人物像を印象づける相手に、“an overwhelming question” (10) を共に分かち持たせようとする。

ブルーフロックが出かけようとする場所は、婦人たちがイタリアルネッサンス期の彫刻家・画家・建築家の Michelangelo (1475-1564) を談話している部屋である。その後、ブルーフロックの一方的な言葉だけが続くので、われわれ読者はこの詩が次第に彼の独り芝居であることに気づくようになる。

ブルーフロックは可能な限り正装して自分の存在を際立たせるが、禿げた頭や痩せた手足を部屋にいる婦人たちに嘲笑されるのではないかと考え込む始末である。彼女たちは、“the faces” (27) や “the voices” (52) と描かれるだけで、不明瞭な姿のままとなっている。

ブルーロックは、“the eyes” (55) や “the arms” (62) も口にする。これらの言葉は、世間一般の女性の目や腕のようであるし、恋の相手の目や腕のようでもある。彼は、人生をいかにも知っているかのように語ることで、哀れな自分を慰めようとしているのであろうか。それとも、恋をする値打ちのない現在の惨めな自分や、優雅な社交界の実態を冷静に見つめとしているのであろうか。

このようなブルーロックの二重の姿に留意して、彼の気取った姿を考えてみたい。彼は詩の冒頭で “an overwhelming question” を強調しながらも、実際には陳腐な恋歌を披露しているにすぎない。彼は、自嘲的な言葉遣いを力説して、単に大げさな表現を口に出しているだけである。彼のおどけた態度は、恋人のイメージを場面の各所でちらつかせ、同時に他の人物たちのイメージ²も抱いて、独りで夢想している姿を表していると言える。彼は狐疑逡巡を装い、われわれも自分の世界へ引きずり込む。

ブルーロックは、婦人たちばかりではなく、“you” も意識している。この詩の表題に注目すれば、ブルーロックの恋の相手は “you” のようであるし、部屋の女性の一人のようでもある。しかも、彼だけが話をして、この人物の存在がわれわれに伝わらない。そこでこの人物は、彼が夢想する憧れの女性だと判断することもできるし、彼の分身³だと判断することもできる。

曖昧な人物描写を理解する手がかりを与えてくれるのが、場面のあちこちで見られるブルーロックの苦悩である。彼は、女性に向かって自分の気持ちを率直に話すことができないでいる。こうした心の迷いから、本当の愛とは何か、生きがいとは何か、求めるべき人間社会とはどういうものなのか、といった人生の諸問題に直面して苦悩する彼の姿がうかがわれる。恐らく彼は、人生についての様々な深い悩みがすべて、“an overwhelming question” であることを思い知らされているのであろう。彼は、こうした深刻な悩みを心に秘めているからこそ、自らの言動をはっきり示すことができないのである。そのため彼の言動に関係する人物は、われわれによっていろいろと解釈されるのである。それが、この詩における人物描写の曖昧性の原因となっている。

ブルーロックの心の悩みは、この詩の終わりの詩行 “We have lingered in the chambers of the sea / By sea-girls wreathed with seaweed red and brown / Till human voices wake us, and we drown.” (129-31) まで続いている。“We” (“we”) や “us” は、もちろん詩の冒頭で見られた “you and I”, つまり、同伴者とブルーロックを指す。彼はこの詩の最後まで同伴者の存在を気にしている。彼が溺死すれば、彼の分身ばかりではなく、彼に付随する恋の相手や一般の読者も溺死する。彼は、人生についての悩みとは無縁な海底の世界を夢想することによって、卑俗な人間の世界から逃れたいと願うが、それができないでいる。最終行の溺死のイメージは、彼が異性の声を思い浮かべて、恋愛を試みたくなる衝動に駆られることを暗示しているであろう。

ブルーロックはそうした誘惑に負けて、冒頭の “Let us then, you and I,” という光景を繰り返すことが予想される。その点で “The Love Song of J. Alfred Prufrock” は、語り手が恋愛をはじめ人生の諸問題に直面して葛藤を続ける円環のイメージを提示する。

“Portrait of a Lady” は三部から構成される。第一部では、霧の深い12月の午後、青年が中年の婦人を訪れる。四本のろうそくが四つの輪を天井に映し出すほの暗い彼女の部屋は、一見して、恋を語り合うのにふさわしい雰囲気醸し出す。婦人は心から訪問者を歓迎する。青年と婦人との言葉のやり取りが始まる。彼女は、若いピアニストによる音楽を話題にする。それは、ポーランド生まれのピアニストで作曲家の Chopin (1810-49) の音楽である。彼女は、部屋の中ばかりではなく会話の内容にも気を配って、青年の心を引きつけようとする。青年は、彼女の話に深入りするのを警戒して、やはり来るべきではなかったと後悔する。一方で、異性への関心が彼の脳裏から完全に消え去ったわけではない。このような彼の心理描写が、“veleities and carefully caught regrets” (15) に表現されている。次に、婦人は暗に目の前の青年を指して、話し相手となってくれる友だちを持つことが生きがいであると熱っぽい調子で語る。そのとき、部屋から逃げ出したい衝動に駆り立てられて、彼は言葉の端々に自分への思いやりを感じさせる婦人の話を、日常生活の平凡な内容（「記念碑」、「最近の出来事」、「広場の時計」、「僕たちの黒ビール」）に切り換える。それは、彼女との間に距離を置こうとするためばかりではなく、自分自身の神経の苛立ちを静めるためでもある。

第二部も、青年が婦人の部屋を訪問する話で始まる。時期は、ライラックの花が咲く翌年4月である。彼女はライラックを生けた花瓶のある部屋で、花の一枝を指でひねりながら、相手に積極的に接近してくる。彼は、気まずい雰囲気から逃れ、公園の片隅で新聞を読みながら心の平静を保とうとする。彼の目に留まるのは、「イギリスの伯爵夫人が舞台に立つ」、「ギリシャ人がポーリッシュ・ダンスで殺害された」、「もう一

人の銀行員が公金横領を告白した」である。このような三面記事の内容から推察して、相手に対する彼の罪意識は、第一回の訪問よりも強まっている。

第三部では、青年は海外留学のため婦人に別れの挨拶にやって来る。彼女は、青年の挨拶をやむを得ないこととして受け止める。彼女の温かい思いやりにかえって戸惑い、彼はその場に長い時間居ることに耐えられない。そのため、彼の凄まじい感情の爆発が起こる。次々と発せられる様態（熊踊り、おうむの叫び、猿の声）が彼の狂乱ぶりを強調する。彼は、内心の動揺をたばこの煙のせいにして、ようやく我に帰る。この場面は、第二回の訪問から罪悪感の度合いがさらに強くなっていることを暗示する。その後、彼は気を取り直すものの、憂鬱な気分で彼女の部屋を去ったと思われる。

“Portrait of a Lady”の終わりは青年の追憶へと変わる。最終行“*And should I have the right to smile?*” (124) が示唆するように、彼は婦人との出会いを海外へ留学する前の出来事として片付けることができないでいる。絶えず精神の不安にさらされて、彼女のことで我が身の存在を自問自答しなければならない状態に置かれている。この詩では、彼女を訪問したときの出来事に苦しめられる彼の苦悩が今後も繰り返される円環のイメージが認められるであろう。

“Preludes”は四つの前奏曲によって構成される。第一前奏曲では、冬の夕方、風をはらんだ夕立が枯れ葉や新聞の紙屑をくるみ、壊れたよろい戸や煙突の頭部をたたく。場末の街角では、寂しげな辻馬車が息をはき、足を踏み鳴らす。これは、どこでも見かける場末の街頭の光景である。外界の事象については、余計な説明が一切排除されて、簡潔で直截な表現となっている。そのため、街頭の一つひとつの光景がわれわれの心の中に連続して流れ込み、そこから次第に退廃的な場末の姿が浮かび上がってくる。抽象的な叙述ではなく具体的なイメージが示され、われわれは、自ら呼び起こした情緒によって、場末の現実のありのままの姿を知覚する。外界の事象は単なる事実の描写だけではなく、人間の存在の様相も暗示している。人々が、枯れ草を踏みつけ、新聞を読んで投げ捨て、壊れたよろい戸や煙突のある家に住み、辻馬車に乗り込む。殺風景な場末の背景には、人間の存在の空ろさが潜んでいる。街に灯がともると、人々のわびしい日常生活が連想される。連続した街のイメージはわれわれに、場末の人間生活の断片を自由自在に思い描かせる。

第二前奏曲は、イメージに詩の表現の活路を求めている。コーヒースタンドへ押しかけて行く人々の朝は、気の抜けたビールの臭いを意識させるといふ。街角の朝と気の抜けたビールの臭いと組み合わせは、今日も繰り返される空虚な場末の生活を暗示する。場末の生活のありきたりな事象は詩の構成要素となって、平凡な朝の情景に潜む倦怠な人間の日常生活を明らかにする。

この前奏曲の最後の3行“*One thinks of all the hands / That are raising dingy shades / In a thousand furnished rooms.*” (21-23) は街頭に見られる家の窓際の情景を通して人間の索漠たる生活を漂わせるが、それを契機に一人の女が語り手の脳裏をかすめる。第三前奏曲ではその女が登場する。いやな夢を見たのであろうか、彼女はベッドから毛布を払いのけ、仰向けになり、まどろみ、夜の無数の重苦しいイメージのを見守る。ベッドでの動きは、悪夢を見ているうちに、自らのわびしい生活についての記憶を次々と思い起こす彼女の姿を感じさせる。彼女の魂を占める無数の卑しいイメージが天井に揺らめくと、そこには彼女の過去の不愉快な気分が漂う。まるで天井をスクリーンにして、そこには彼女の内面の姿を投影させているのかのような詩の効果が生み出されている。

第四前奏曲の終わり近くになると、都会の様々な出来事に対する語り手の胸の内が明らかになる。その胸の内は、“*I am moved by fancies that are curled / Around these images, and cling: / The notion of some infinitely gentle / Infinitely suffering thing.*” (48-51) に描かれている。彼は、荒涼とした街に呼応する、生気のない人間の姿を追憶した。“thing”という言葉から判断して、人間は画一された都会生活の中で、いわば物体化された「もの」に等しいように表現されている。その表現は、人格の喪失を暗に指摘している。言い換えれば、都会生活の倦怠に満ちた有様に注目して、人間社会の問題点を鋭くあばいている。そうした都会生活の姿は、人間にとって恐怖の世界と言ってよいであろう。一方、「もの」は物体化された人間ばかりではなく、語り手から憐憫の情を寄せられた人間、すなわち、荒廃した都会の中で生きることを余儀なくされた人間も象徴する。それは、「もの」を形容する“*The notion of some infinitely gentle / Infinitely suffering thing*” からうかがうことができる。人格の喪失と深い人間愛が彼の心に影を落としている。彼は、直裁簡明なイメージを駆使して、都会生活の現状を印象的に描くが、そこには深い人間的な愛が溢れている。

第四前奏曲の最後の2行“*The worlds revolve like ancient women / Gathering fuel in vacant lots.*” (53-

54) も、48-51 行と同様に、知的で技巧的な表現だけに片寄っていない。世界が空き地で薪を拾い集める老婆にたとえられるイメージは、“The worlds” というイメージに働きかけ、倦怠のために空しく時間を過ごす人間社会の様々な世界を具象化する。加えて、老婆の行為には、空しい現実社会の中でも「生」の意義を探ろうとする語り手の姿勢が投影されている。

第四前奏曲では、語り手の人格の喪失観と深い人間的な愛、空転する世界と「生」の意義を秘めた世界といった重層構造が、現実と象徴の融合の中で成り立っている。この重層構造のメカニズムは、醜い現実の社会とそれに対する語り手の憂いを表している。

“Preludes” の断片的な構成には注目すべき詩的効果が認められる。それは、この詩が夕暮れに始まり、夕暮れで終わる円環構造となっていることである。そこには、一つの輪になって空転するイメージの群れが見られる。この円環のイメージが、実は混沌とした人間社会を象徴している。第四前奏曲の最後の 2 行には、そうした渦巻く不安な世界の中で調和と秩序の世界を求める語り手の行為も暗示されている。

“Rhapsody on a Windy Night” は、見慣れていたものがこれまでとは違って感じられる表現形式で始まる。時は真夜中で、月光に照らされた街路の広がりがある。この月光の世界が、日常の観察から受ける印象を綴る詩の世界の舞台となる。一人の男が月明かりの街灯のそばをとほと歩いて通りすぎようとする。ところが街灯は、彼の心を揺れ動かして歩みを止める。午前 1 時半、街灯が突然語り始め、彼の目を路面に光の輪を投げ出す方へ向かわせる。それが戸口に立つ女である。彼女は、男に話しかけようか話しかけまいか、とためらっている。ドアの開き具合は、彼女が歯をむき出して、にやにや笑うさまに擬人化されている。それは同時に、彼女が男の方を誘惑する表情でもある。その上、着物の裾の擦り切れや媚びたような目じりの皺から、うらぶれた女の身の上までもがわかる。

午前 2 時半、男は街灯の語りかけで、猫の貪欲な行為を見せつけられ記憶していた事柄を呼び起こす。舌を出す猫の様子に伴って、波止場を走る玩具を子供が自動的にポケットに入れる。何を見ているのかわからない子供の目から、以前に観察したこと（明かりのついたよろい戸から中を覗き込もうとする街の人間の目）が思い出される。このような街の人間の盗み見の動作から、記憶したこと（フジツボをつけた年寄り蟹がステッキの端にかみつく行為）が追憶される。連想によって無関係にあるものを結合させる手法は、猫の貪欲な行為が廃墟と化した街の現実の原動力となっている。

午前 3 時半、街灯は男の頭上の月がまるでウインクして微笑みかけるかのように、その光で街の隅々まで照らし出していることに言及する。過去の嫌な記憶とは無縁な月の姿が、男の内部で優しい心遣いの女性として擬人化される。月は男の内部に踏み込み、そこで彼の相手の女に変身する。彼女の手が、埃とオーデコロン匂いのする紙のバラをひねる。このポーズは、相手が自分の気持ちに応じようとしないので、苛立つ彼女のしぐさである。彼女は、男と対峙する夜の憩いのひと時しか楽しめない孤独の境涯である。彼女はまた、戸口に立っていた女と同じような身の上の人間である。ここには、相手の女からの愛情を察知しながら、何もしてやれなかった後ろめたさを思い返す彼の心境が暗示されている。

午前 4 時、男は月を見つめて物思いにふけた後、自分の住まいに帰りつく。彼はいつも記憶していたドアを開ける。部屋の中にはベッドがあり、歯ブラシが壁にかかっている。このようなありきたりの現実の描写は、目が覚めると生きがい失って、空虚な日常生活を繰り返す彼の姿を予想させる。この詩はそうした彼の日常生活に関する円環のイメージを与える。

“Rhapsody on a Windy Night” に続いて、“The Boston Evening Transcript” (1915), “Aunt Helen” (1915), “Cousin Nancy” (1915), “Mr. Apollinax” (1915), “Hysteria” (1915), “Conversation Galante” (1909) が記載されている。最後を飾る詩は “La Figlia Che Piange” (1911) である。これら七つの詩に表現された内容を考察してみたい。

“The Boston Evening Transcript” は、場末の夕暮れの光景を描いている。夕暮れになると日中の生活環境から解放されて、何かをしたくなる気持ちが沸き起こる人々もいれば、ボストン夕刊紙を読むのが決まった日課である人々もいる。後者の中にハリエット (Harriet) おばさんがいる。語り手はこの夕刊紙を彼女に届ける。彼女は今日もこうした日課を終えるであろう。“Aunt Helen” は、表題のヘレン伯母さんの死にまつわる話を描写している。ヘレン伯母さんは生涯独身で、質素であった。ヘレン伯母さんが亡くなったとき、街はずれは天まで届くような悲しみに包まれたという。この詩の語り手も、“The Boston Evening Transcript” と同じく、場末で生きている人々の毎日の暮らしの断片を伝えている。

“Cousin Nancy” では、ナンシー・エリコット (Nancy Ellicott) の振舞い (喫煙、ダンス) が、女性の

礼儀正さを大切に考える伯母さん連中には理解されない。最初はおしとやかにあるべき女性に反するナンシーの行為への風刺であると思われたが、その風刺が伯母さん連中の上品な社交界に潜む虚飾な世界にも向けられている。“Mr. Apollinax”では、フラッカス夫人（Mrs. Phlaccus）の屋敷やチャニング・チータ（Channing-Cheetah）教授宅へやって来たとき、アポリナックス氏の笑いは、責任を負わない無邪気で胎児のような哄笑である。この詩の終わりは、語り手の視線がフラッカス夫人とチータ教授夫妻に注がれている。彼に記憶されるのは、一切れのレモンと噛み残されたマカロンである。この記憶は、一切れのレモンという上品な食べ方と、それとは対照的なマカロンの食べ残しを連想させる。この連想によって、上品ぶった社交界の人々の品行は、実は、アポリナックス氏の下品な品行と変わらないことが読み取れる。

“Hysteria”に登場する女性のヒステリックな笑いが、心身共に自分と一体となるように相手の語り手を挑発する。笑うときに彼女の乳房が揺れると、語り手は自制を崩壊しかねない。そこで彼は、この日の時間を確保することに集中しようとする。そうしないと、彼自身がヒステリックとなって、彼女のペースに巻き込まれかねないからである。“Conversation Galante”は、表題が嘆く少女という意味なので、語り手が相手に棄てられた少女に対応する過程を描く内容となっている。二人の思いがすれ違う会話から、彼らの間には不毛の愛が存在する。語り手は、精神の不安にさらされないように、我が身の存在を防御した話に終始した姿勢をとっている。そのため彼は、夜や昼を問わず不安を感じ、良心の呵責を噛みしめるであろう。

第一詩集の冒頭の詩は、人間社会の都会生活に焦点を当てて、異なる様相（男女間の実らぬ愛、上品ぶった社交界、倦怠な場末）を表現していた。男女間の実らぬ愛は、“Portrait of a Lady”, “Hysteria”, “La Figlia Che Piange”で見られた。上品ぶった社交界は、“Aunt Helen”, “Cousin Nancy”, “Mr. Apollinax”で描かれていた。倦怠な場末は、残りの詩で扱われていた。そうすると第一詩集は、その表題から判断して、上述した都会生活の三つの様相をテーマとする冒頭の詩を起点として、各テーマのいずれかを展開させていることになる。

第一詩集の構成内容をさらに掘り下げてみたい。冒頭の詩を除いた他の詩は、①男女間の実らぬ愛、②上品ぶった社交界、③倦怠な場末に分けることができた。たとえば、①に属するグループについては、ある詩が別の詩の同じテーマや冒頭の詩の場面を連想させるであろう。②に属するグループや、③に属するグループについても、同じようなことが言える。このような第一詩集の構成内容そのものがわれわれの脳裏に、円環のイメージを提示して、上述した都会生活の三つの様相から見た人間社会の退廃的な姿を強く焼きつけている。その際、“Portrait of a Lady”は②の円環のイメージを通して、第一詩集の構成内容についての同じようなイメージを強化する役割を果たしているし、“Preludes”と“Rhapsody on a Windy Night”は③の円環のイメージを通して、そうした役割を果たしている。エリオットは、第一次世界大戦（1914-18）の最中に退廃的な都会生活で彩られた第一詩集の刊行によって、20世紀の前半を不安な時代としてとらえる詩人としての立場をとっている。

2. *Poems* (1919) の比較の描写

1919年、第二詩集 *Poems*（7編を所収）が刊行される。ここでは、代表的な4編の詩について第二詩集の掲載順に論及する。

詩集の冒頭は“Sweeney Among the Nightingales”（1918）である。酒場で、娼婦はエイプネック・スウィーニー（Apeneck Sweeney）を誘惑しようとするが、コーヒー茶碗をひっくり返して、誘惑に失敗する。代わって現れるのが Rachel *née* Rabinovitch（レイチェル、旧姓ラビノヴィッチ）（23）という女である。ウェイターが運んできた果物の中から葡萄を殺意のあるような爪先でもぎ取る。すると、女が先の娼婦と共謀して、自分を殺害しようとするのではないかと予感して、スウィーニーは酒場を出る。その後、“The nightingales are singing near / The Convent of the Sacred Heart”（31-32）が描かれる。この描写は、女たち（娼婦、レイチェル）がナイチンゲールとなって、キリスト教会の尼僧修道院の近くで歌っていることを示唆する。この鳥はわれわれに、ローマの詩人 Ovid（43 B.C. - ? A.D. 17）が著した *Metamorphoses* の中で、フィロメラ（Philomel）がトラキアの国王テレウス（Tereus）から陵辱を受けた後、ナイチンゲールに化身したギリシャ神話を思い起こさせる（『転身物語』巻6, 208-19を参照）。そうすると、エリオットの詩の女たちは一種のコーラスとなって、スウィーニーの死を皮肉にも告知しているのである。過去の醜い人間の行為が形を変えて現在に繰り返されるのである。

“The Hippopotamus” (1917) では、丸い胴体で短い四足の河馬の姿が紹介されている。この動物は、足元がおぼつかないので、獲物を求めるとき、よろめいてしまう。一方、“the True Church” (7) は、足元がしっかりしていて、配当が自ずと集まってくる。このように、卑俗な河童と聖なる教会を併置して、人間社会の墮落が指摘されている。

“Mr. Eliot's Sunday Morning Service” (1917-18) は、黒衣の長老たちが若者の改悛者たちの列に近づく場面を表現している。若者たちは、贖罪の小銭を用意して教会に集まっている。教会の壁に「煉獄の門」の絵が示されている。この絵は、死者の魂が天国に入る前に煉獄で罪を浄められる光景である。しかし、この魂の姿が改悛者たちにはほんやりとしている。また、教会は彼らの罪を積極的に清めようとする姿勢がうかがわれない。この詩の最後の場面では、宗教に無関心な俗物のスウィーニーと、知識をひけらかして不毛な論争をしてきた博識家の神学者たちとが描かれている。この詩は、墮落した人間社会と人間救済を忘れた教会を共に批判している。

“Whisper of Immortality” (1917-18) の前半は、17世紀イギリスの2人の形而上学派詩人 —John Webster(1580?-1625?) と John Donne(1572-1631)— を紹介する。ウェブスターにとって人間の死についての思想は感覚的に理解することであった。ダンにとって出来事についての思想も、やはり感覚的に把握することであった。

この詩の後半は、グリシュキン (Griskin) という名前のロシアの女を登場させる。彼女は、ブラジル産の雌豹にたとえられ、強烈な匂いの持ち主である。形而上学派詩人たちは彼女のような対象を感覚的にとらえる格好の題材とするが、一般の人間は肉欲に駆られた相手として扱うのである。ここにも、世俗的な人間の欲望の一端が垣間見られる。

4編の詩は共に、比較という詩人の視点のもとで書かれている。⁴ その視点は、ギリシャ神話と卑俗な男、形骸化した教会と世俗的な人間、形而上学派詩人たちと世俗的な一般人という比較である。それぞれの比較の対象には共通点が見られる。それは人間社会の墮落である。

比較の描写の手法が見られる詩を収めた第二詩集に共通した内容は、エリオットが第一次世界大戦後の人間社会の醜惡な内面を、歴史的過去にまでさかのぼって鋭く批判する対象としている。第一詩集を視野に入れると、第二詩集の詩の構成から浮かび上がる人間社会の墮落（全体像）は、繰り返される日々の生活が歴史的過去の醜惡さにつながっているという点で、第一詩集に見られない歴史的視点を伴った円環のイメージを与えるものである。第二詩集の個々の詩は、そうした全体像の様相を担っている。エリオットは、第一次世界大戦の直後における人間社会の退廃的な現実が歴史的過去と密接な関係があることを指摘している。

3. *Poems* (1920) の構成内容

第三詩集の *Poems* (1920)⁵ は、第二詩集の刊行以後に脱稿された詩を含んでいる。その中から3編の詩—“Gerontion” (1919), “Burbank with a Baedeker: Bleistein with a Cigar” (1919), “Sweeney Erect” (1919)— に表現されている内容を検討して、この詩集の構成内容に見出される円環のイメージを考察する。

詩集の冒頭の詩は“Gerontion”である。この詩では、表題がそのまま語り手の名前となっている。名前は、ギリシャ語で「小柄な老人」を意味するゲロンチョンである。“Here I am, an old man in a dry month, / Being read to by a boy, waiting for rain.” (1-2) という第一節の書き出しは、老人が先行き短い人生を感じていることを暗に示している。少年から読んでもらっている本の内容から、彼は古代ギリシャの戦争から第一次世界大戦までの間に起こった戦争を思い浮かべる。ゲロンチョンが住む借家、実際に荒廃した場所、彼の衰退した心身は、単に現状の描写にとどまらず、古代ギリシャからこの詩が発表される前の第一次世界大戦に至るまでの人間や文明の退廃を象徴している印象を与える。

第一節は、歴史的な過去と現在との関係をこれ以上解説しているわけではない。その関係は第二節に表現された描写から読み取れる。ゲロンチョンは同節で、“Signs are taken for wonders. ‘We would see a sign!’” (17) と語る。17行の後半の文は、「マタイによる福音書」第12章38節の「先生、わたしたちはあなたから、しるしを見せていただきとうございます」⁶ (“Teacher, we wish to see a sign from you.” *The Bible* 846) から借用したものである。奇蹟を要求する律法学者パリサイ人に対して、キリストは「邪惡で不義な時代は、しるしを求める」(「マタイによる福音書」第12章39節) と答える。この聖書からの適用は17行の前半に認められる。“sign” (「徴」) は神の意志の証を意味する。パリサイ人のように信仰心のない

人々は、この「徴」を神の奇蹟であると誤解してしまう。自分の青春時代に言及して、ゲロンチオンは4人の墮落した人々を話す。シルヴェロ氏 (Mr. Silvero) は、フランスの都市のリモージュ (Limoges) で陶器に執着する。ハカガワ (Hakagawa) 氏は、イタリアのベネチア派の音場家ティチアーノ (1477?-1576) の絵画に魅了される。ド・トルンキスト夫人 (Madame de Tornquist) は心霊現象の会合を開催する。フォン・クルプ嬢は、信仰から注意をそらし、世俗の事柄に目を向けようとしている。4人は共に、晚餐式のパンとぶどう酒に関心を示していない。彼らの振舞いは、イエス・キリスト、聖書、人間の言葉の密接な関係をなし崩しにしている。

このように、パリサイ人の墮落と4人の墮落とが併置されている。その併置から明らかになるのは、過去の人々と現代の人々との共通点である。それは人間の墮落の歴史的な繰り返しである。

第三節の冒頭のゲロンチオンは、“After such knowledge, what forgiveness?” (33) と問う。彼は、第二節で明らかになった人間の罪が赦される方法を模索して、“Think / Neither fear nor courage saves us. / Unnatural vices / Are fathered by our heroism. Virtues / Are forced upon us by our impudent crimes.” (43-46) と述べる。“fear” や “courage” は戦争にかかわる人間感情の表れである。この感情が戦争の勝敗に影響を及ぼすかもしれないが、兵士の心を満たすかどうかを彼は考えている。彼の狐疑心の背後にあるのは、人間が神の恩寵を無視して、“Unnatural vices” や “impudent crimes” を犯すほど利己的となっていることである。これらの罪の歴史的な反復の認識は、彼が発する “whispering ambitions” (35) や “vanity” (36) に反映されている。

ゲロンチオンは第四節で、人間の墮落を解決する方法の糸口得るため、“I have lost my passion: why should I need to keep it / Since what is kept must be adulterated? / I have lost my sight, smell, hearing, taste and touch: / How should I use them for your closer contact?” (57-60) と自問する。これは、彼が “you” に語りかける場面である。この二人称は、少なくともイエス・キリスト (Williamson 111) と彼の内面の自己が考えられる。彼は、この世の人々が墮落しているのはイエス・キリストを軽視しているためであると認識し、自分自身や社会の有様を歴史的な視点から見つめ、本来の人間性についての無知を悔い改めている。自らが話す内容が物語るように、彼は情緒や五感に力強さが見られないことを自覚している。それは、彼が人間の墮落を自分の現在の姿によって伝えている一方で、自分自身の精神的な再生に目覚めようとする真摯な姿も伝えていることを意味する。

第五節では海の情景が示される。それは、“Gull against the wind, in the windy strait / Of Bell Isle, or running on the Horn. / White feathers in the snow, the Gulf claims,” (69-71) である。ゲロンチオンの行動には二つの象徴的な意味が感じられる。一つは、彼が聖霊を意味する風に逆らって進んだ結果、惨めな状態に陥ることである。かもめがベルアイル海峡 (カナダのラブラドル島とニューファランド島との間に位置する海峡) の強風に苦しんで、ホーン岬 (チリの小島にある南米最南端の岬) に落下し、瀕死の危険にさらされることを考えるとき、われわれはゲロンチオンの悲劇的な運命を予測することができよう。もう一つは、彼が現実の風に立ち向かう勇敢な人間で、逆境に直面しても精神的な再生の望みを諦めないことである。“White features in the snow” が暗示する清浄のイメージ、ホーン岬での生への執着、死後のよみがえりをほのめかすメキシコ湾流 (Gulf Stream) が、そうした彼の勇敢な姿を示唆する。ゲロンチオンに関する二重のイメージの意味は、彼が現在の人間社会の退廃を逆手にとって、その社会の未来を切り開こうとすることであろう。

“Gerontion” は、“Tenants of the house, / Thoughts of a dry brain in a dry season.” (74-75) で終わっている。“Tenants” は、彼の脳裏にある前述の人々 (彼自身、彼が口に出す人物、読者) を暗示する。彼がこれらの人々に、自分と同じような精神状態であることを認識するように季節感で訴えている。この季節感が冒頭の2行 “Here I am, an old man in a dry month, / Being read to by a boy, waiting for rain.” を思い出させる。“a dry season” も “a dry month” も冬の季節に言及している。これらの語句は、彼が冬の季節に取り留めない話をしていることを伝えている。そこから明らかになるのは、この詩が円環のイメージで構成されていることである。円環のイメージはわれわれに、人間が過去から延々と続く罪深い現実を知らせている。

第三詩集に新たに収録されている他の詩も、“Gerontion” の場合のように、歴史的過去と現在との関係を表現の中心に据えている。“Burbank with a Baedeker: Bleistein with a Cigar” (1919) では、娼婦のヴォルポーネ (Volupine) の客であるブライシュタイン (Bleistein) が登場する。原生動物のような容態の彼はイタ

リアの画家のアントニオ・カナレット（本名 Giovanni Antonio Canal, 1697–1768）の景観画を見つめるが、ろうそくの燃えかすの消失のイメージがわれわれに過去から現在への衰退の様相を連想させる。それはヨーロッパ文明の衰退である。ベニスの取引所であるリアルト（Rialto）は、かつてはヨーロッパの商業経済の象徴的な存在であったが、現在は積荷の下に鼠が横行し、プライシュタインが毛皮の取引で金儲けをするような場所となっている。その場所で、とりわけ彼とヴォルポーネとの肉欲だけの愛が際立っている。

“Sweeney Erect”（1919）は、娼婦のドリス（Doris）と表題のスウィーニーを紹介する。彼らはそれぞれ、ナウシカア（Nausicaa）とポリフィーム（Polypheme）にたとえられる。加えて彼は、類人猿オランウタンのような人物である。ナウシカアはスケリア（Scheria）の王アルキノオス（Alcinous）の娘で、遭難したオデュッセウスに着物と食べ物を与えて助けている（『オデュッセイア』（上）6歌を参照）。ポリフィームは一つ目の巨人族キュクロプス（Cyclops）の首領で、オデュッセウスとその仲間により目を潰され、彼らの脱出を許してしまう（同9歌を参照）。ドリスと客のスウィーニーとの関係は、オデュッセウスに献身的な女性と悪漢のポリフィームを併置することによって、人間社会における男女間の不毛な愛を暗に描いている。

類人猿に擬せられたスウィーニーは体毛で覆われ、下の裂けたところが足で、切れ込んだところが目である。彼は朝ベッドから起きて、桃色の首筋から尻までかみそりで剃るようにドリスに向かって言う。彼が脛を剃ってかみそりの切れ味を試すと、彼女は自分が殺されると勘違いしたためか、てんかんの発作を起こす。彼女の発作はそのうち治まり、何事もなかったかのように素知らぬ顔をする。このような男女関係は、“Burbank with a Baedeker: Bleistein with a Cigar”の場合と同じように、愛欲だけで結ばれている。上述した二つの詩は、男女間の不毛の愛を通して、罪深い人間を暗に指摘している。

第三詩集に新たに収録されているのは、“Gerontion”, “Burbank with a Baedeker: Bleistein with a Cigar”, “Sweeney Erect”であった。冒頭の“Gerontion”は、前述した円環のイメージを通して、歴史的過去から繰り返される三つの様相（④ 罪深い人間、⑤ 男女間の不毛の愛、⑥ 人間社会の墮落）を描いている。④と⑤は⑥の様相として見なすことができる。他の二つの詩は、これら三つの様相の一面を伝えている。

第三詩集の前半では、五つの詩が上述の④～⑥のいずれかを受け継ぎ、冒頭の詩における円環のイメージの一端を印象づけるのである。

第三詩集では、上述した三つの詩の後に、第二詩集に含まれていた四つの詩—“Sweeney Among the Nightingales”, “The Hippopotamus”, “Whisper of Immortality”, “Mr. Eliot’s Sunday Morning Service”—が続いている。これら四つの詩では、“The Hippopotamus”と“Mr. Eliot’s Sunday Morning Service”が④を示しているし、“Sweeney Among the Nightingales”と“Whisper of Immortality”が⑤を示している。これらの詩は、④や⑤の描写の鑑賞に役立つばかりではなく、⑥の理解も深めさせている。

同じ詩集の後半は、“The Love Song of J. Alfred Prufrock”を冒頭とする第一詩集 *Prufrock and Other Observations* の詩がそのまま記載されている。この詩では、①男女間の実らぬ愛、②上品ぶった社交界、③倦怠な場末、に分類されて、①から③までが繰り返される円環のイメージを提示していた。そこから、現在の退廃的な人間社会の姿が浮き彫りにされた。第一詩集の他の詩が①から③までのいずれかの断片を伝えていたので、われわれはこの人間社会の姿を再確認することができた。第三詩集の後半では、このような鑑賞方法が適用されている。そうすると、この後半では、円環のイメージの印象を拠り所にして、第三詩集の前半における歴史的過去から続く人間社会の墮落した現在がより明らかになるのである。

こうした第三詩集の構成内容から、人間の歴史的過去を注視した前半における円環のイメージの印象と、現在の状況を注視した後半における円環のイメージの印象の二種類が併存する。エリオットはこの詩集の構成内容を通して、第一次世界大戦後の人間社会の退廃的な現実を第二詩集よりも深く探究している。

4. *The Waste Land* の死の描写

初期の代表的な *The Waste Land* にはエピグラフがある。それは、理由が明白でないが、古代ギリシャのクマエ（Cumae）の巫女シビル（Sybil）が死を願望することである。この詩は、彼女にまつわる死のイメージを土台として、人間社会の死の様相や人間の精神的な死の様相を示唆する場面を描いている。⁷

この詩は五部から成り立っている。第一部“The Berial of the Dead”の冒頭は、“April is the cruellest month, breeding / Lilacs out of the dead land, mixing / Memory and desire, stirring / Dull roots with spring rain.”（1-4）である。ここに記述されている花やその根は、われわれ人間としてたとえられていると

解釈できよう。そうすると、4月の季節を基本とする4行は、生命の躍動が始まる期待を裏切り、人間社会を死の大地と見なしたり、そこに住む愚鈍な人々の追憶や欲望を示したりする。

その後に描かれるのは、冬の朝のラッシュアワーに、実業家、サラリーマン、タイピストなどの通勤者たちがロンドン橋を渡って金融や商業の中心街のシティーへ足早に向かう光景である (Hayward 93)。エリオットは、第一次世界大戦後のロンドン市民を中世イタリアの詩人 Dante Alighieri (1265–1321) の長編叙事詩 *La Divina Commedia* に描かれた地獄の住人に見なしている (“What Dante Meant to Me” 128)。都会の退廃的な雰囲気の中で注目されるのは、通勤者たちの進む方向が聖メアリー・ウルナス教会 (Saint Mary Woolnoth) である。この教会が午前9時に鳴らす鐘の音は、シティーの始業時間 (『荒地』229) ばかりではなく、キリストが死んだ9時 (現在の午後3時) を思い出させる (Southam 153)。機械的な鐘の音は、退廃的な様相を漂わせる人間社会の中、亡霊のようなロンドン市民が宗教に無関心であることを響かせる。

聖メアリー・ウルナス教会の鐘の音が9時を打ち終わって死の響きを漂わせると、場面は語り手から一人の知人が呼び止められる光景に移る。この光景で暗示されるのは、その知人によって庭に埋葬された死骸の不安な行末、苗床への霜の悪影響、人間と友だちである犬の悪行についての心配である。こうした描写から把握できるのは、われわれが第一部の冒頭の残酷な季節感の背景となっている死のイメージ (人間社会や人間の退廃) を再認識することであろう。

第二部 “A Game of Chess” の冒頭に登場するのは、クレオパトラを思わせるような有閑女性である。この女性は、そのような外観とは裏腹に心が落ち着かず、部屋を訪れた男性に精神的な不安を訴える。相手からの快い返事が返ってこないで、彼女は自堕落な生活をほのめかす。それは彼女の孤独な心情の表れである。ここには、有閑女性と男性との不毛の愛が取り上げられている。

同部の後半は場末の酒場へと変わる。そこでは、リル (Lil) と彼女の知人の女が会話している。リルは、知人の女の語りかけに対して、隠し立てをせず素直に返事している。この女は、リルが31歳という年齢の割には老けて醜くなった現在の姿を遠慮なく非難している。この会話から受ける二人についての印象は好対照である。リルは相手の女が語りかける言葉に、いとも簡単に気楽な受け答えをしている。お人よしのリルをたしなめる女は、隙があれば夫のアルバート (Albert) を横取りする思惑をちらつかせている。男女間の不毛の愛が下層階級にまで及んでいる。

第三部 “The Fire Sermon” に描かれるタイピストは、冬の朝、ロンドン橋を渡っていた通勤者かもしれない。仕事を終えて帰宅した彼女の部屋に、家屋周旋屋の店員である若者がやって来る。これは不倫の恋の光景である。彼が出ていった後、タイピストは独りで部屋を歩き、髪を何気なく手で撫でつけ、その手で蓄音機をかける。このような動作は、生きる希望を見失った彼女の姿を表している。彼女には相手に対する愛情を感じられない。これは、中産階級の日常生活における男女間の不毛の愛の一例である。同部には、総じて、三つの階級の共通点 (男女間の不毛の愛) が認められる。

同部の最後の5行 (317–21) に目を移してみたい。“To Carthage then I came” (317) は、初期キリスト教の指導者の St. Augustine (354–430) が *Confession* の中で青春時代の肉体の欲望を告白した言葉から引用されている (“Notes on the Waste Land” 79⁸)。“Burning burning burning burning” (318) は様々な欲望の炎を “burning” の繰り返しによって暗示し、“O Lord Thou pluckest me out / O Lord Thou pluckest” (319–20) は神から罪深さを救われた彼の喜びを表現している。最後の “Burning” (321) は、317–20 行に記述された内容を踏まえ、われわれと一緒に、人間の心の浄化を願っている。

第三部の最後の5行はわれわれに、第四部 “Death by Water” で人間の心の浄化に気づかせるための準備段階の役割を果たすことになる。そこでは、フェニキア人のフレバス (Phebas the Phoenician) が現世 (カモメの叫び、深海のうねり、損得) から引き離される場面がある。これは、彼の死体から現世の様々な思いが解き放たれていく状態を示唆する。第四部の最後の詩行は、“Gentle or Jew / O you who turn the wheel and look to windward, / Consider Phlebas, who was once handsome and tall as you.” (319–21) である。“you” は、異教徒やユダヤ人を問わず、この詩を読むわれわれを暗に指している。われわれは、風上に注意をしながら舵を取る人にたとえられ、フレバスの水死を考え、と声をかけられる。それは、心の浄化を始めるように、という意味である。その声は軽妙な口調で、われわれを異教徒やユダヤ人として言及したり、フレバスをわれわれと同じようにハンサムで長身の人として呼びかけたりする。その声はわれわれに、現世の物欲への執着心から離れるように促している。

第五部 “What the Thunder Said” には, “*Quando fiam uti chelidon — O swallow swallow*” (428) (“When shall I be like the shallow?” trans. Southam 197) という詩行がある。原注 (“The Notes on the Waste Land” 80) によれば, その詩行の出所は, 作者や発表年が不詳のラテン詩である “Pervigilium Veneris” (“The Vigil of Venus” trans. Southam 197) である。この詩人は, いつになったら春がやって来て, つばめのように歌うことができるのかを希求する。同じ原注は, 上の詩行についてフィロメラを念頭に置いていることを明らかにしている。すでに “Sweeney Among the Nightingales” で言及したように, テレウス王により捕らえられようとしたとき, 妹のフィロメラはナイチンゲールに化身する。その際, 姉のプロクネ (Procne) はつばめに化身する。そこで第五部の 428 行は, 姉妹のように, 精神的な再生を切望する。

同部の最後の 2 行は, “Datta. Dayadhvam. Damyata. / Shantih shantih shantih” (432-33) である。この詩の 401 行 “Datta: what have we given?” の原注 (“Notes on the Waste Land” 80) に記載された *Brihadaranyaka-Upanishad* では, 創造神のプラジャー・パティ (Paraja-pati) が “Da” を 3 度繰り返したとき, 三組の末裔 (神々, 人間, 悪魔) は創造神の言葉を, それぞれ “Damyata”, (“Control”), “Datta” (“Give”), “Dayadhvam” (“Sympathise”) として受け取ったと伝えられている (Southam 192)。そこで 432 行は, 三組の末裔の場合のように, われわれに語りかけているであろう。

ここで, われわれは 432 行の三つの言葉の意味をどのように理解したらよいかを考えてみたい。第五部の原注 (“Notes on the Waste Land” 79) に基づけば, 同部の前半のテーマの一つは, キリストの復活の日にエマオへ向かう二人の弟子の旅である。このテーマを留意して同部を読めば, われわれはエルサレムの東側にあるゲッセマネ (Gethsemane) での最後の祈りから死を迎えるまでのキリストの受難にまつわる様々な出来事を思い浮かべることができよう。そうすると, 432 行の三つの言葉の語りかけは, こうである。「ダッタ」は信仰深い人間になるように励めよ, 「ダヤヅワム」はわれわれの心を奮い起こそうと努めるこの詩の内容に共鳴せよ, 「ダミヤタ」はそのためには目先の欲望を制御することが肝心である, ということである。

第五部の最終行の 433 行は, サンスクリットから引用されたものである。原注 (“Notes on The Waste Land” 80) は, ここで三回使用されている言葉の意味が, “‘The Peace which passeth understanding’ is our equivalent to this word [shantih].” と説明する。その説明から判明するのは, 同行が 432 行の三つの言葉をわれわれに理解してほしいと願う内容になるであろう。その背景にあるのは, *The Waste Land* を読むにしたがって, われわれがこの詩の冒頭について把握した様相 (人間社会の死, 人間の精神的な死) の具体例を認識してきたことである。ここでもわれわれがその冒頭の把握を連想するという意味で, この詩は円環のイメージを与えるであろう。そこには, 1920 年の第三詩集に見られた二つの円環のイメージ (人間の歴史的過去から反復される人間社会の悪, 現実の人間社会の醜悪) を単一の詩の中に統合した詩人の手法が認識されるし, 第一次世界大戦後の人間社会の退廃的な姿に対するエリオットの鋭い時代感覚も反映されている。

おわりに

前期の詩としての対象は, “Conversation Galante” (1909) から *The Waste Land* (1922) までである。“The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910-11) は, 終わりの詩行が冒頭の詩行を連想させる円環のイメージによって, 人間社会の醜悪な面 (男女間の不毛の愛, 倦怠で退廃的な都会生活) が今後も繰り返されることを示唆する。*The Prufrock and Other Observations* (1917) は, この円環のイメージによってうかがわれる, そうした醜悪な面の様相を語り手たちの様々な視点から描いた第一詩集である。*Poems* (1919) は, 現実社会の退廃的な姿を人間の歴史的過去までさかのぼって追及している第二詩集である。“Gerontion” の詩は, 書き出しと終わりの描写の類似に基づく円環のイメージの背後にある語り手の歴史的な意識によって, 過去の聖書から続く地獄のような人間の現実を伝えている。この詩を冒頭に飾る第三詩集 *Poems* (1920) は, 第一詩集と第二詩集の詩を含めて, 宗教の墮落までも及び, 現実社会の退廃的な姿をさらに詳しく指摘する。その際, 二つの詩集の詩は, この姿の断片として理解することができる。*The Waste Land* は, 聖書や神話に言及して, 人間社会や人間の死の様相が反復されることを予期させる円環のイメージを思い起こさせる。この円環のイメージを通して, 人間の内面に巣くう罪深さが以前よりも深く表されている。

T. S. エリオットは 20 世紀の前半を不安の時代としてとらえ, その時代にふさわしい内容として, 墮落し

た人間社会の様々な様相を探究する。その探究がわれわれに、上述した様々な形の円環のイメージによって伝えられる。円環のイメージは、この様相が彼の初期の詩に認められる特徴であることを印象づける役割を果たしている。

注

1. エリオットの詩からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。括弧内の数字は詩の行数を表す。
2. たとえばブルーフロックは, “Shall I say, I have gone at dusk through narrow streets / And watched the smoke that rises from the pipes / Of lonely men in shirt-sleeves, leaning out of windows?” (70-72) と語る。彼が目撃するのは、夕暮れ時の狭い通りでワイシャツ姿になり、窓から身を乗り出した寂しげな男たちのパイプの煙である。これは、求愛を成就できない我が身の心象風景であるばかりではなく、婦人たちの部屋の周辺にあるわびしい場末の情景を指摘している。
3. George Williamson は、ブルーフロックの分身を “his amorous self”, “his suppressed self”, “the amorous self, the sex instinct, direct and forthright” であると説いている (64-66)。Grover Smith は, “I” と “you” との区別を “his thinking, sensitive character and his outward self” と見なし、また、ブルーフロックが単に “his body” ではなく, “his whole public personality” に話しかけていると論じている (16)。Philip R. Headings は、この詩が “the inner and outer or private and public selves” の対話であると見なしている (17)。
4. この点については、拙稿「*Poems* (1919) における T. S. エリオットの比較の描写」の内容を参考にしていることをお断りしたい。
5. イギリス版では *Ara Vos Prec*, アメリカ版では *Poems* という表題である。ここでは、*Poems* (1920) として標記する。
6. 引用は日本聖書協会改訳の『聖書』による。
7. この点については、拙稿「*The Waste Land* における T. S. エリオットの死観」の内容を参考にしていることをお断りしたい。
8. 原注からの引用の数字は *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* の頁数を表す。

引用文献

- Eliot, T. S. *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*, London: Faber and Faber, 1969.
- . “What Dante Means to Me.” 1950. *To Criticize the Critic and Other Writings*. London: Faber and Faber. 1965. 125-35.
- Hayward, John. Notes pour La Terre Vain. *Poésie*. 1947. Trans. Pierre Leyris. By T. S. Eliot. Paris: Édition du Seil. 1969. 91-103.
- Headings, Philip R. *T. S. Eliot*. New Heaven, CT: College and UP, 1964.
- Smith, Grover. *T. S. Eliot's Poetry and Plays: A Study in Sources and Meaning*. 1950. Chicago: U of Chicago P, 1974.
- Southam, B. S. *A Student's Guide to Selected Poems of T. S. Eliot*. 1968. London: Faber and Faber, 1994.
- Williamson, George. *A Reader's Guide to T. S. Eliot: A Poem-by-poem Analysis*. 1953. New York: Noonday P, 1972.
- The Bible, Containing the Old and New Testaments*. 1970. *Old Testament*, 1952. *New Testament*, 1946. New York: American Bible Society, 1973.
- エリオット, T. S. 『荒地』. 岩崎宗治訳. 東京: 岩波書店, 2010.
- オウイデイウス. 『転身物語』. 1966. 田中秀央・前田敬作訳. 京都: 人文書院, 1975.

古賀元章, 「*The Waste Land* における T. S. エリオットの死観」『福岡教育大学』59 号 1 分冊 (2010) : 19-27.
---, 「*Poems* (1919) における T. S. エリオットの比較の描写」『福岡教育大学紀要』61 号 1 分冊 (2012) :
29-37.

ホメロス, 『オデュッセイア』(上), 松平千秋訳, 1994, 東京: 岩波書店, 2006, 全 2 冊(上・下), 1994,
『聖書』, 新約聖書, 1954, 旧約聖書, 1955, 日本聖書協会改訳, 東京: 日本聖書協会, 1969.